

[担当教員]

槻橋修（准教授）

小林直紀（安井建築設計事務所） 中江哲（鹿島建設）

[Teaching Assistant]

不動菜里（A67） 大西琴子（A67） 植田実香（A67）

■課題の概要

現代都市に暮らす人々にとって、子供を産み育てることには様々な課題がある。要因としては核家族化による地縁の希薄化、女性の社会進出による共働き夫婦の増加、単親世帯の増加などが挙げられる。子育ての負担が親に集中することが、都市でのライフスタイルとの間でストレスを生み、育児ノイローゼや幼児虐待といった招かれざる事態の遠因ともなっている。

従来より社会における「発達保障」の場として児童福祉施設は整備されてきているが、現代のような家族観、自然観が多様化する時代において、都市は子供達に、また子供を育てる親たちに、どのような場所を提供すればよいだろうか。本課題では以下に挙げる3つの方向性からひとつを選択し、子供のための空間、都市における福祉のあり方について考えてもらいたい。

- (1) 次世代をになう児童達が、健やかに育つための支援環境として、自由に利用できる施設。
- (2) 子育てに関わる様々な人が自由に集まり、交流するための施設。
- (3) 乳幼児の発達保障の場、生活空間を提供する施設。
- (4) 3つの施設が、交差点を中心に子育てスクエアとして一体的な空間をつくるように、それぞれが尊重すべき共通のデザインの方針（デザインコード）を設定することが望ましい。

■敷地

灘区都賀川の河川公園に隣接する敷地で、周辺は住宅地。

- ・「児童館」敷地①約 2030 m²＝東西 30m× 南北 70m(変形あり)

- ・「子育てカフェ」敷地②約 1550 m²＝東西 62m× 南北 25m
- ・「保育所」敷地③約 3100 m²＝東西 62m× 南北 50m
- ・用途地域等（近隣商業地域 / 建蔽率 80%, 容積率 400%, 防火地域）



国土地理院 地理院地図 (<https://maps.gsi.go.jp/>) をもとに編集者作成

課題：敷地

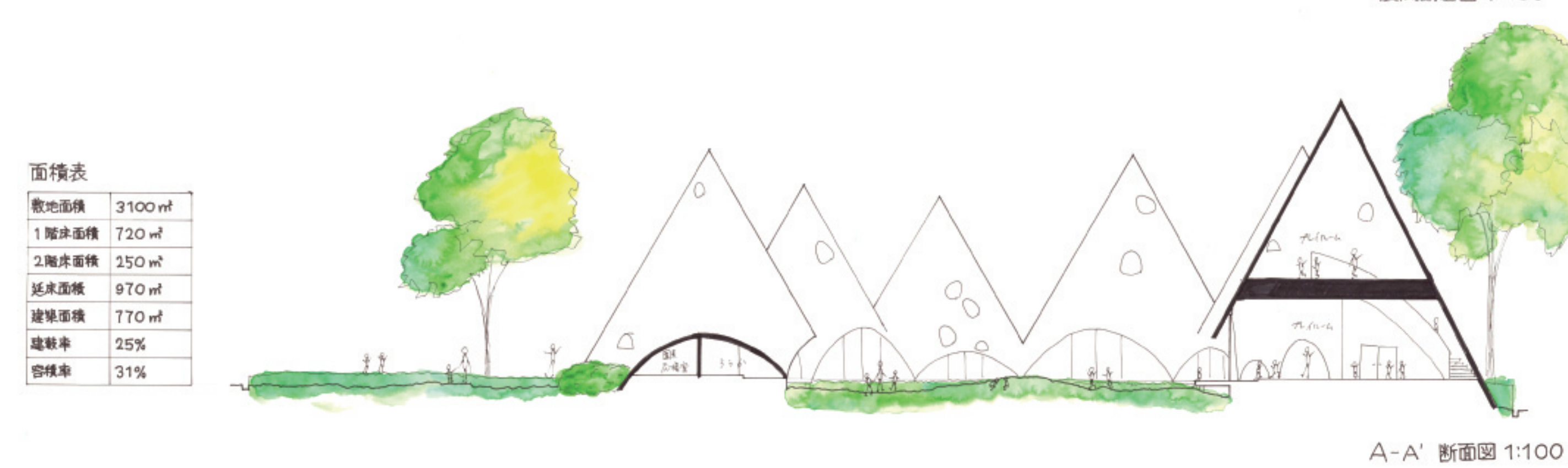
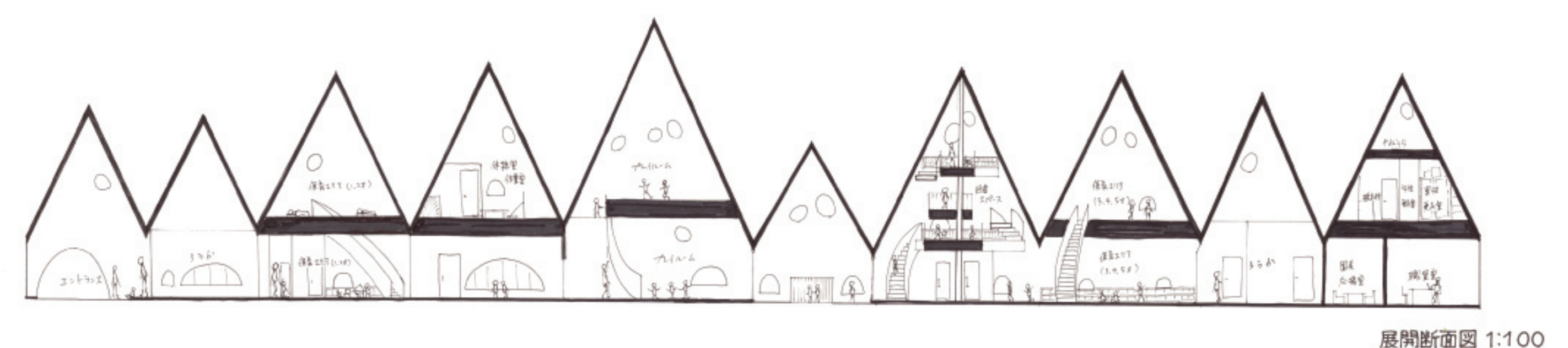
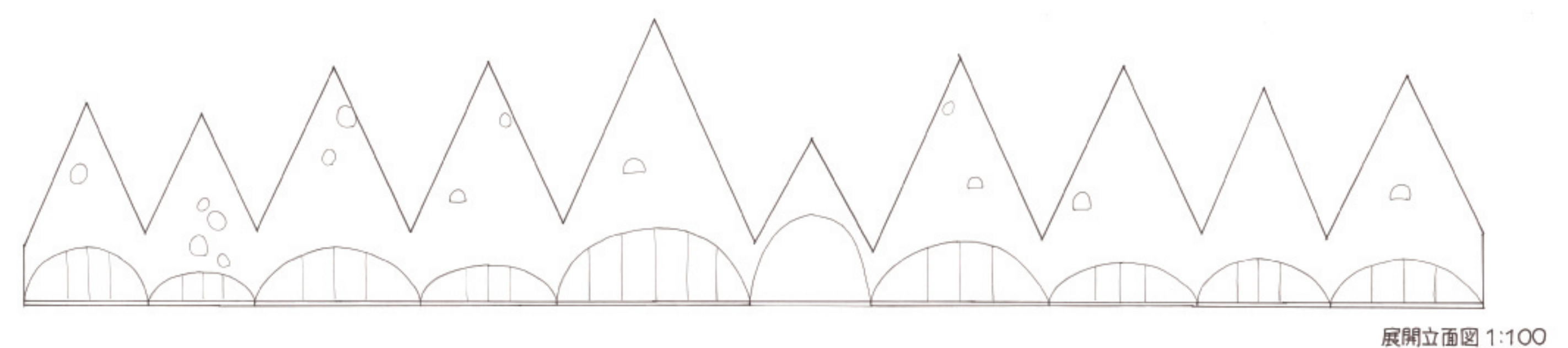
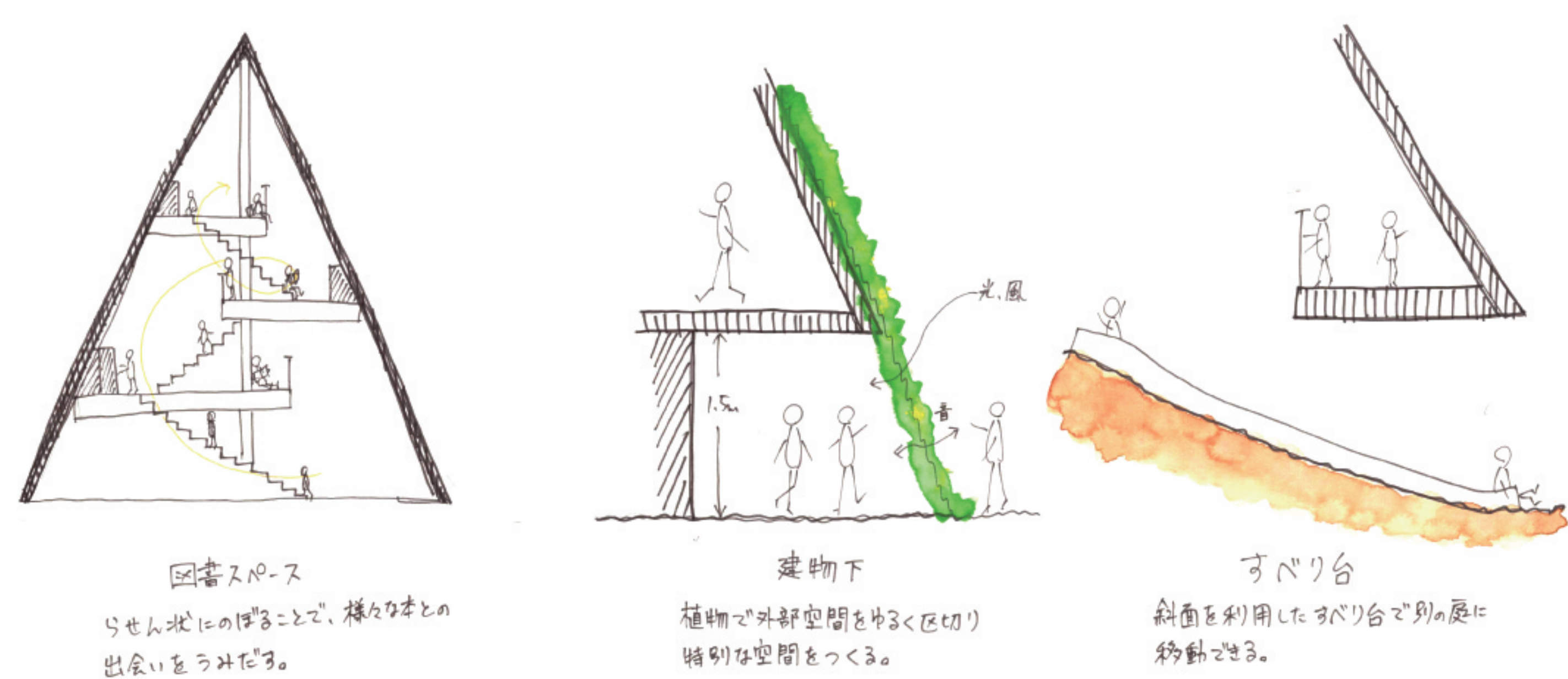
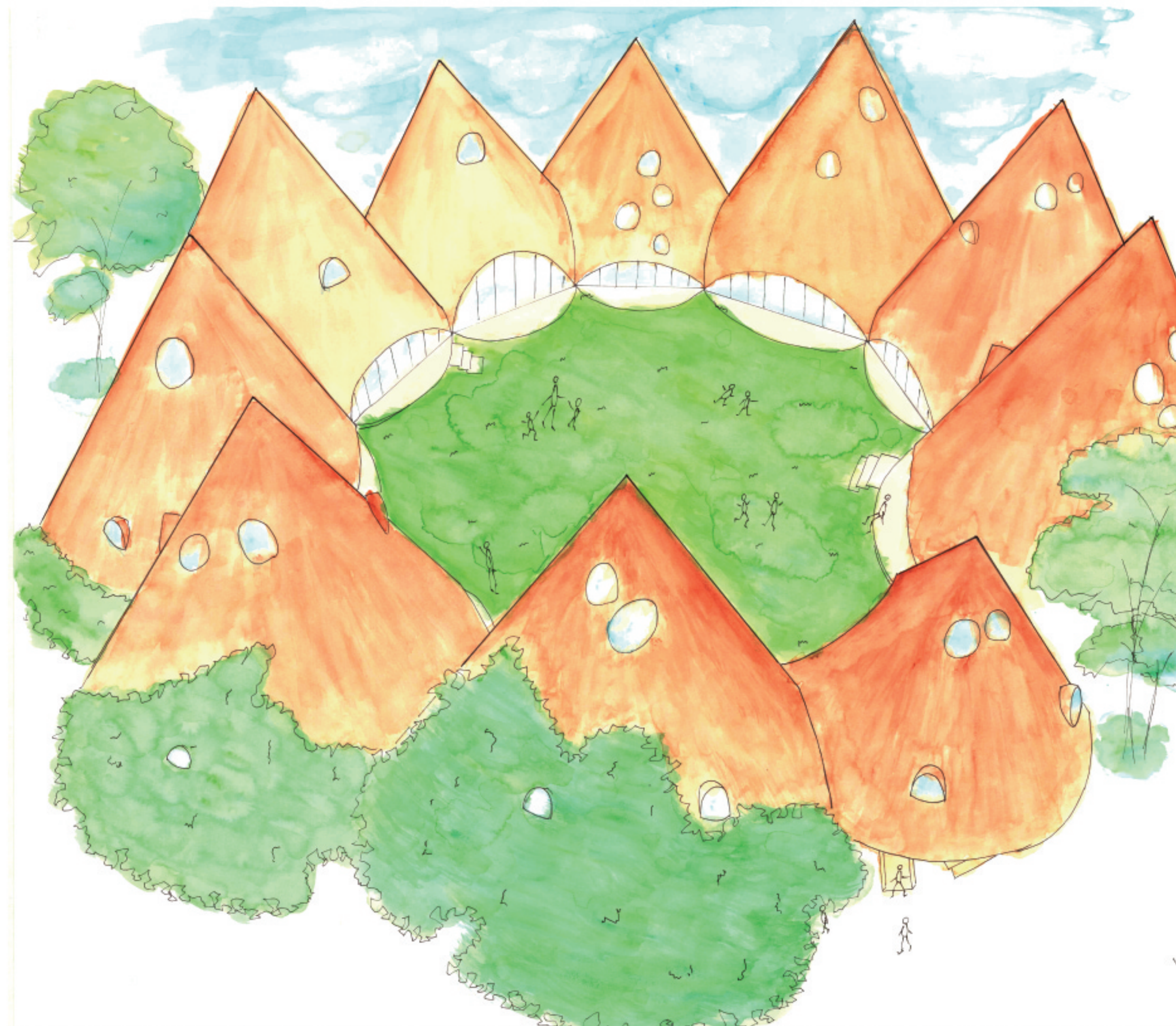
■講評会の様子



コドモの森

清水理佳

円錐形の建物とアーチ状の開口部というシンプルな組み合わせによる保育園を提案する。建物内、建物間、中庭と園庭などで様々な循環が起き、コドモの成長をソトからもウチからも見守ることができる。

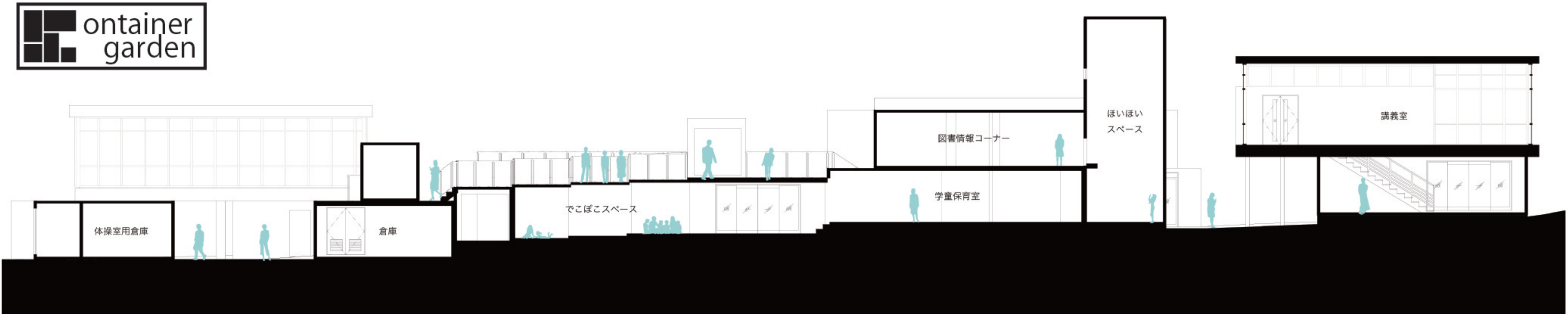
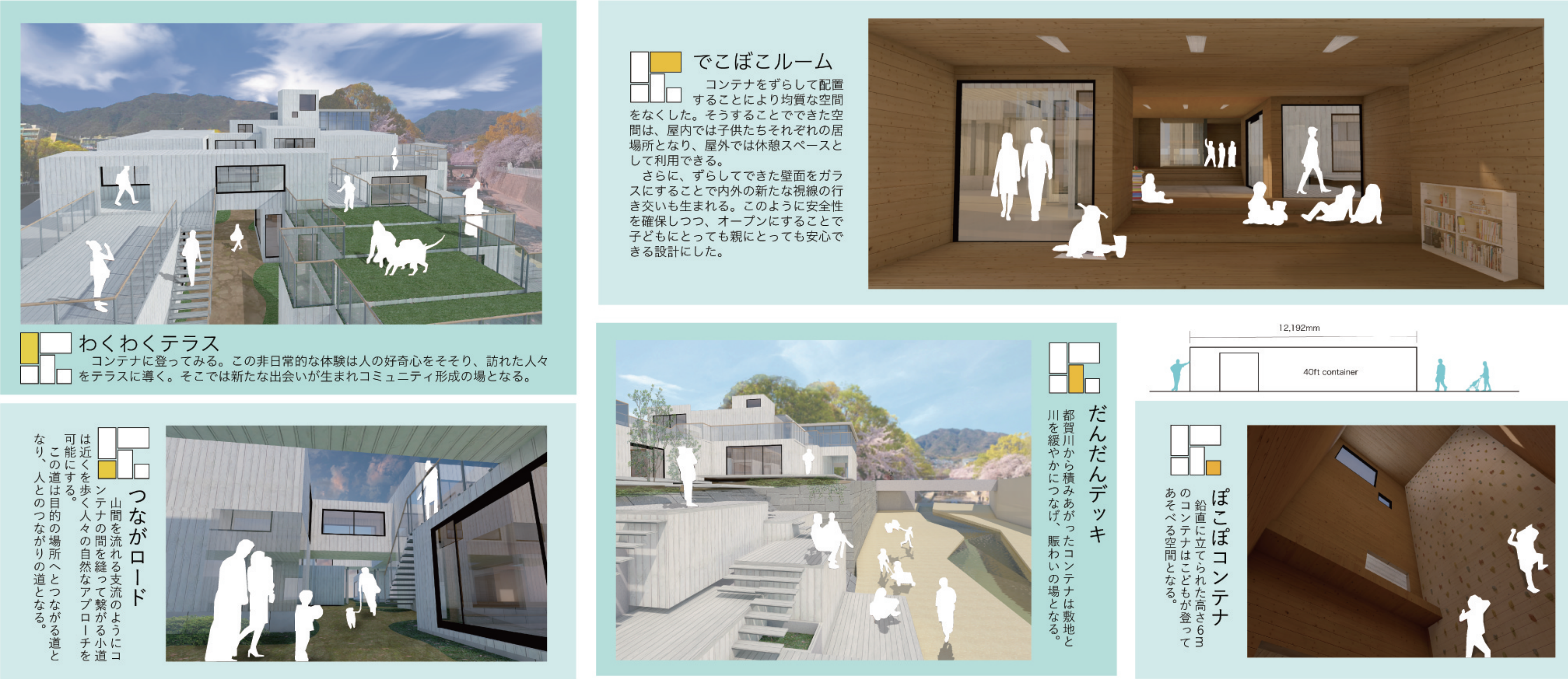


面積表	
敷地面積	3100 m ²
1階床面積	720 m ²
2階床面積	250 m ²
延床面積	970 m ²
建築面積	770 m ²
建蔽率	25%
容積率	31%

Container Garden

尾野拓海

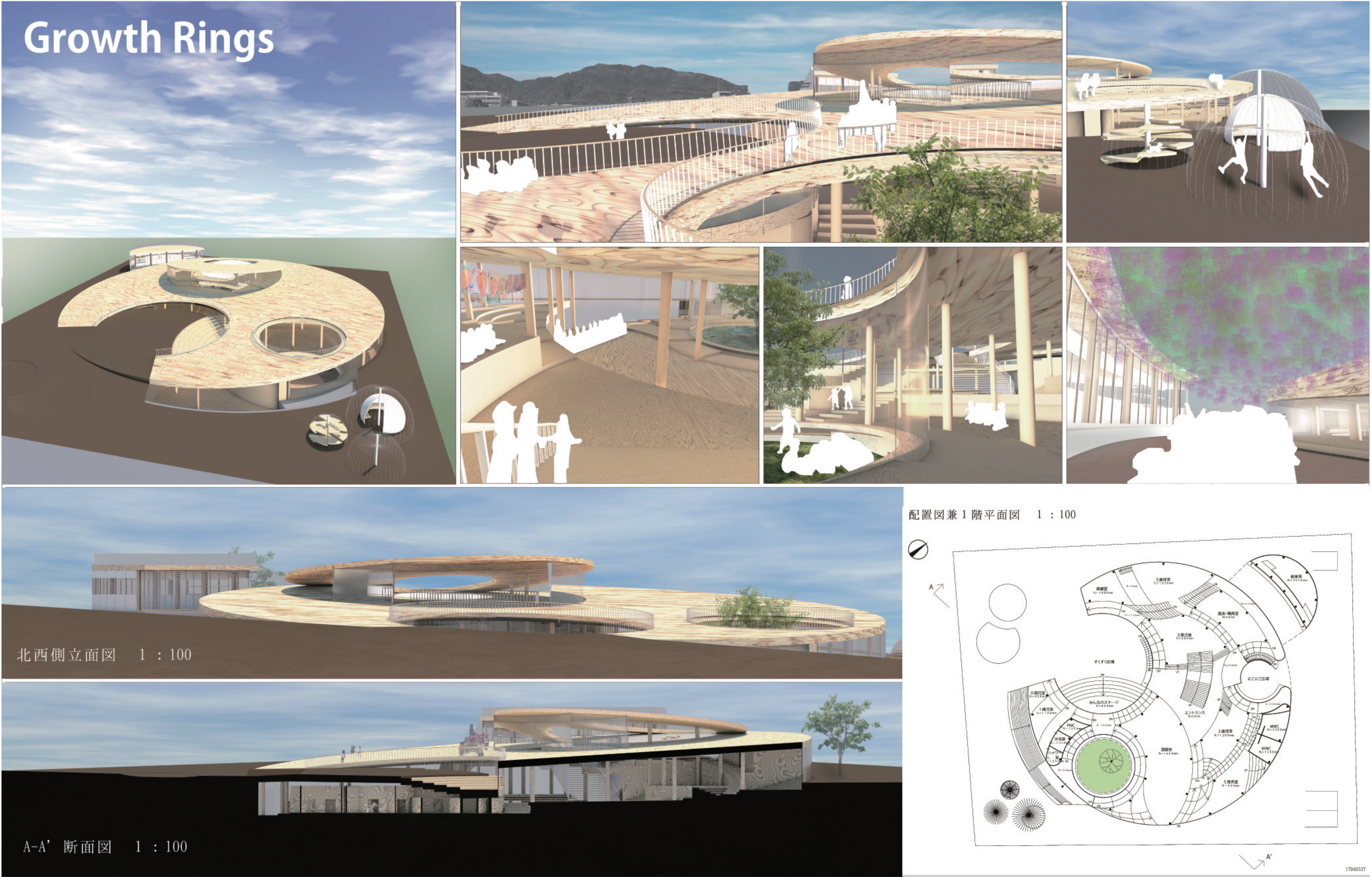
都賀川沿いに佇む児童館。実際のコンテナの寸法を基本単位としたブロックを積み上げて空間を構成する。これにより多様な空間を創出し、来訪者や子どもたちの好奇心をくすぐる非日常的な空間体験を生む。



Growth Rings

中村幸介

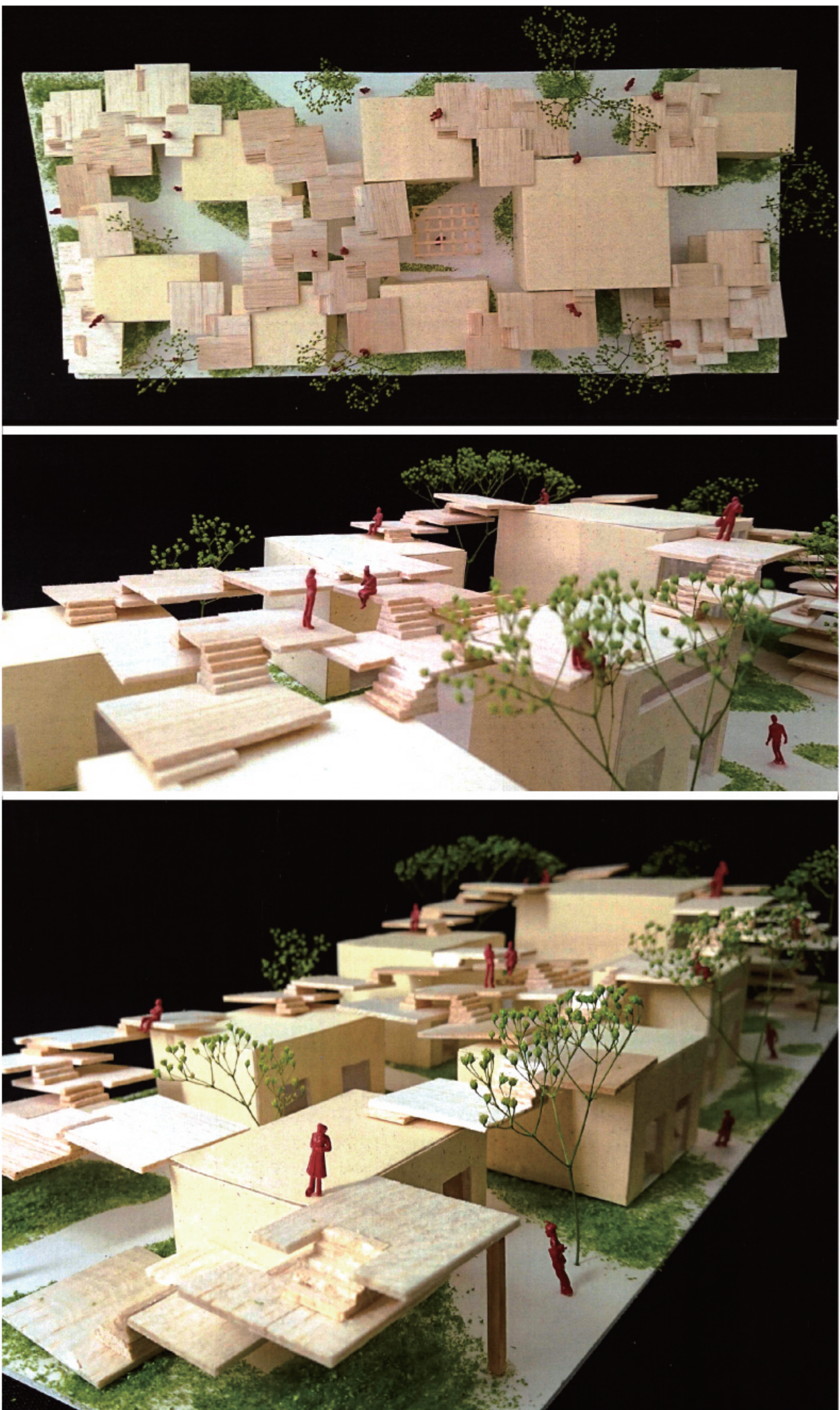
子ども達の成長を、木の成長の証である年輪（growth ring）と重ね合わせ設計した。地面から続く屋根や、運動場、庭、教室は、円に沿う配置を行なった。走り回る園児の軌跡は、この保育園の年輪となる。



繋ぐ ー多用途子育てカフェー

原隆太

北が住宅街、南が大通りと南北で全く性格の違う敷地に、多用途子育てカフェを設計する。木の足場で繋がれた、子供動線と大人動線の二つの主動線が、様々な交流を生む。あらゆる年齢層が利用するこのカフェは、普段ではできない交流を生み出している。



空間を切り取る

八木和

都市にある建物の多くは均質な空間から構成されている。そのような環境で暮らす子どもたちのために、内と外が入り混じる、均質でない空間からできた保育園を提案する。各所に設けられたテラスや天井の四角い穴は、外を切り取り、内が続く均質な空間を乱す。

